

Lecture

Presentation

Debate

FD

FACULTY
DEVELOPMENT

MUSASHINO UNIVERSITY

REPORT

2019



Contents	02	学長挨拶
	03	FDSD 検討小委員会の活動
	04	全学 FDSD
	08	学生 FD
	10	目的別 FD
	11	授業評価アンケートを踏まえた 学科 FD の推進について
	16	授業改善小委員会の活動
	19	令和元年度学科 FD 実施報告
	23	令和2年度 FDSD 活動計画について

令和元年度 武蔵野大学FDレポート

内部質保証体制確立のために FDの更なる充実を

武蔵野大学学長 西本 照真



本学は令和元年度に大学基準協会による第3期認証評価（大学評価）を受審し、同協会が定める大学基準に適合していると認定されました。この第3期認証評価では、内部質保証制度がより一層重視され、大学の質保証システムが実質的に機能しているか、教学マネジメント体制が構築され適切に運用されているかを問われています。そのため、平成30年度の自己点検においては、全学レベル／カリキュラムレベル／科目レベルでの内部質保証体制の確立に注力して取り組み、その結果、内部質保証におけるFDの重要性について改めて認識することが出来ました。

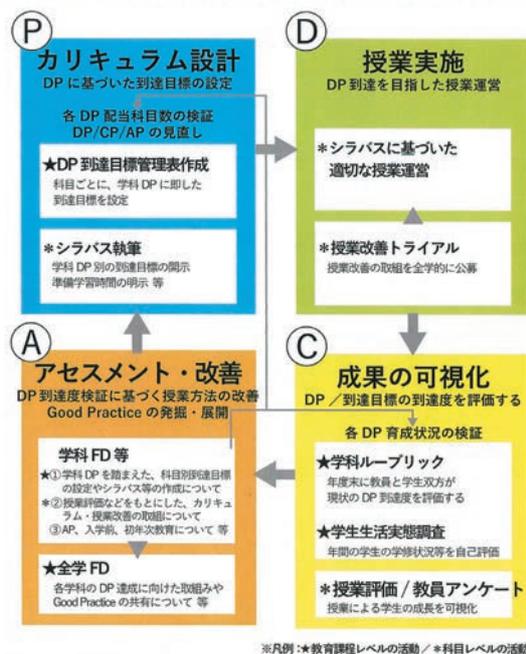
右の図は、自己点検の中で改めて確認し図式化した、本学の教育の質向上のためのPDCAサイクル図です。学科、研究科ごとにディプロマ・ポリシー（DP）を定め、それに紐づいたカリキュラム・ポリシー（CP）・アドミッション・ポリシー（AP）を策定してカリキュラム設計を行い、授業の成果は学科ルーブリックや授業評価アンケート等で検証しています。この成果検証に基づき、各学科が次年度に向けた改善のためのFDを実施することで、PDCAのサイクルが完成します。逆に言えば、プランを立て、チェックするところまでで終わっていても、改善は見込めません。学科で、また全学で、課題を共有し解決策を議論することで初めて次のプランに繋がるのです。このように、FD活動は重要な役割を担っています。

認証評価においては、これらカリキュラムレベルの質保証の取り組みについて、一定の評価をいただくことができました。しかし一方で、大学院や通信教育部において同等の活動ができていない点が課題として指摘されています。従って、今後は学部・学科での取り組みをさらに充実させると共に、研究科や通信教育部においても、より積極的なFD活動を推進し、学部同様のPDCAサイクルの確立を目指していきたくと考えています。

本学は、大正13（1924）年、世界的な仏教学者で文化勲章受章者でもある高楠順次郎博士によって、仏教精神にもとづいた浄土真宗本願寺派の宗門関係学校として、現在の中央区築地に設立されました。昭和25（1950）年に武蔵野女子短期大学を、15年後には武蔵野女子大学を設立し発展の礎を築きました。さらに平成15（2003）年に現大学名へ名称変更し、翌年の全学部男女共学化及び薬学部設置を契機に、大学改革を推進してきました。平成24（2012）年にはこれまでの武蔵野キャンパスに加えて臨海副都心に有明新キャンパスを開設し、令和2（2020）年4月現在11学部19学科12大学院研究科、通信教育部2学部3研究科、1専攻科と2別科、23研究所・センターを擁する規模に至りました。この矢継ぎ早の改革に、学外から少なからず注目を浴びているのも事実です。

<武蔵野大学 教育の質的向上サイクル>

DPに基づいたカリキュラム運営のPDCAサイクル



近年の教育改革の歩みでは、平成27（2015）年に学修の質向上とギャップイヤー活用のために4学期制の一部導入、同時に3ポリシーの見直し、教育課程体系化のためのカリキュラムマップ導入を推進しました。

同年、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ採択を受け、フィールド・スタディーズ（長期学外学修）の推進を本格的に開始しました。翌平成28（2016）年には、手掛けてきた改革の検証機能を高めるべく、教育の質的評価のための全学授業評価アンケート（毎学期）、本学オリジナルの全学学生生活実態調査もスタートさせ、昨年は全学及び学科・研究科ごとにアセスメント・ポリシーも制定しました。

このようにPDCAサイクルの基盤構築を図り、エビデンスに基づく検証体制を整備する取組を進めています。

今年度（2020年度）は、有明キャンパスに新校舎が完成し、看護学部等の移転など変化の年を迎えています。加えて、2024年の100周年に向けて様々な中期計画に具体的に取り組みながら、新たな武蔵野メソッド構築を目指す元年であるとも言えます。

世界に最も近いグローバルな総合大学としての地歩を固めるとともに、全学の力を結集して教育改革、及び教育の質保証を目指すFDそしてSDの更なる充実に取り組むべく、引き続きご理解と、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

FSDS検討小委員会の活動

令和元年度FSDS検討小委員会メンバー

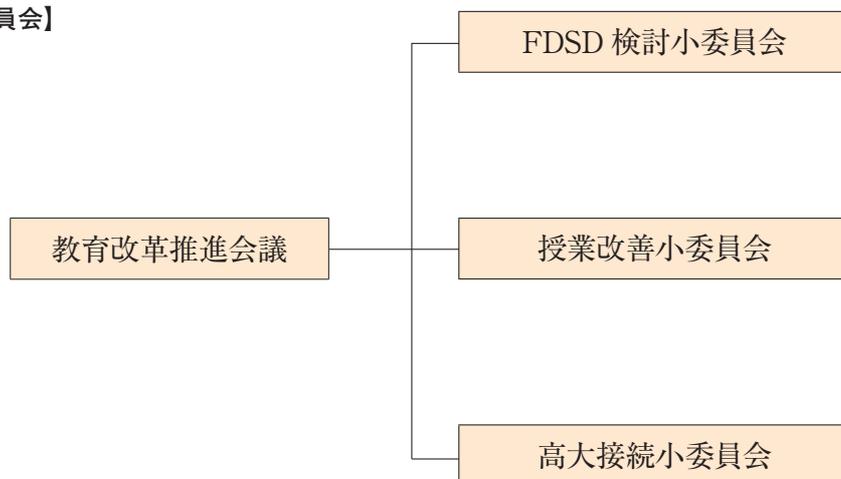
- 委員長 渡部 博志 キャリア開発部長
- 北條 英勝 教務部長
- 伊藤 泰彦 学生部長
- 高橋 大樹 経営学科 准教授
- 三次 真理 看護学科 准教授
- 今福 理博 こども発達学科 講師
- 和賀 信之 教育改革推進室長

FSDS検討小委員会における審議事項

第1回：令和2年3月9日(月)「令和元年度FSDS活動の振り返り及び令和2年度FSDS活動計画について」

令和元年度 小委員会設置状況

【定例小委員会】



全学FDSD

第1回 全学FDSD研修会

開催日：令和元年5月21日（火）

テーマ：

各学科の授業改善に向けた Good Practice の共有 —学修者本位の教育への転換に向けて—

数理工学科・教育学科・看護学科事例発表

講演Ⅰ

相互授業参観から見えてきたこと

■ 数理工学科 高石 武史 学科長

数理工学科は開設して5年であり、今回は4年目のFDについての発表となる。

本学科においては、大学院数理工学専攻がスタートした。また、本学科の学生の三分之一が大学院進学を希望するという状況の中、教育のあり方を考えることは最重要事項である。とりわけ、基礎科目と専門科目の連結性が課題であると考え、平成30年度は、教員相互の授業参観を行い、それについての意見交換を行った。そこでは、ノートの取り方について学生への指示の仕方を明確にする、説明する際に声を大きくする、学生レベルに合わせた講義内容のボリュームを調整するといった意見が挙げられた。そのことを踏まえ、令和元年5月のFDでは、さまざまな議論がなされたが、今回はそのうち①教員による授業参観のメリット・デメリット②ノートの取り方について③説明する際の声の大きさについて、その概要を報告するものとする。

授業参観のメリットとしては、学生たちが受けている授業の内容確認ができる、自分やほかの教員の講義に対する評価を通してお互いに学びあうことができる、授業へのアドバイスを受けて、授業間の内容調整や改善ができる、学生の気持ちに戻ることができる、などの点が挙げられた。それに対して、デメリットとして挙げられた点は、教員と学生の負担が増えることが懸念されるということであった。



全体の様子

学生のノートの取り方に関する現状把握、それに対する教員の要望、ノートを取る必要性などについて確認しあうとともに、学生の学ぶ姿勢や心構え、モチベーションの維持など、抜本的な課題に対する対策の必要性を教員間の共通理解とした。

声の大きさについては、ワイヤレスマイクの使用の有無、話す向きなどの外的要因よりも、教員との距離感を近くしていくことの方が重要ではないかという意見もあり、それに付随して、もっと小さめの教室を増やすなどの対策も必要ではないかという示唆も出された。

今年度のFDにおける相互意見交換全体としては、個人ではなかなか解決の糸口がみえないことに対して、各自のアイデアや工夫を聞けると同時に、さまざまな視点を与えてくれる大変貴重な機会であるという感想を得た。

講演Ⅱ

授業評価の高い授業事例とそのポイント

—教員・学生への聞き取りをもとに—

■ 教育学科 初谷 和行 准教授

平成30年12月13日に実施した学科FDでは、授業改善に役立てることを目的とし、昨年の前期授業の授業評価アンケート、DP1～DP4の項目ごとに評価点が高かった授業を選抜し、その教員とその教員が選んだ学生に対して聞き取り調査を行った。聞き取りの目的は、教員に対しては学科FDで報告された内容について確認することで、学生に対しては学修者が当該授業をどう感じているかを知ること、評価の高い学修者主体の授業には、何か共通点や授業のポイントがあるのではないかという仮説を実証することにある。

聞き取りは、教員・学生の両方に共通した質問による半構造化インタビュー形式で行った。質問の内容は①当該授業を一言で表現②授業内容、授業の工夫に関すること③授業での学びに関することの3点である。

櫻井先生の「英語科指導法A」、小野先生の「初等算数科指導法」、初谷の「国語科指導法」、佐藤先生の「初等社会科学指導法」について、教員と学生それぞれに対して、授

業内容、特徴を聞き取った。

結果を総括すると、アクティブ・ラーニングは、主体的・対話的で深い学びと言ひ換えられるが、それぞれの4つの授業に対して、こうしたアクティブ・ラーニングの視点からしてもさまざまな工夫がなされていて、そのことを通じながら学生は学んでいるということが言える。さらに、奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』(2017年)には、アクティブ・ラーニング実現のための原理ということで、有意味学習、オーセンティックな学習、明示的な指導の3つの原理が紹介されているが、今回取り上げた授業では、そういったことも目指されていたと思われる。

最後に、カリキュラム・デザインをするための概念ということに関して、C・ファデル『21世紀の学習者と4つの次元：知識、スキル、人間性、そしてメタ学習』(2016年)では、知識、スキル、人間性という3つの円を持って表し、これらを総合的に教育していくことが21世紀に求められる教育であると述べているが、近年ではそれに加えて、これらの学習をいかにメタ認知していくかがポイントであると言われている。その点においても今回取り上げた授業では、必ず振り返りを行い、その中で、それぞれ3つの円に関する振り返りが出来ているのではないかと考えている。

2. 聞き取りについて		14
● 目的	<ul style="list-style-type: none"> ・学科FDで報告された内容についての確認(教員) ・学修者が当該授業どう感じているのかを知る(学生) 	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 「学修者主体」の授業に関する共通点や授業のポイントがあるのではないだろうか </div>	
● 方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教員・学生の両方に共通した三つの質問による半構造化インタビュー(各人15分前後) 	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">①当該授業を一言で表現</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">②授業内容、授業の工夫に関すること</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">③授業での学びに関すること</div>	

講演Ⅲ

学習パラダイムへの転換を目指して
—ファシリテーターとしての教員の在り方を学ぶ—

■ 看護学科 関森 みゆき 教授

看護学科では、各看護領域における教授法の工夫、あるいは学生の学習姿勢等についてグループ内での発表・討議による共有を実施してきた経緯の中で、学修者主体の学習の必要性を感じ、アクティブ・ラーニングが必要であることに結論づいている。平成29年度のFDでは「学び方を学ぶ力を育むアクティブ・ラーニング」というテーマで、

外部講師を招待しての講演会、ディスカッションを実施してきたが、その際、教育パラダイムから学習パラダイムへの転換の必要性が強調された。看護学における授業形態としては、講義、演習、実習であり、演習と実習は学生が主体的に取り組まざるを得ないスタイルと言ってもよいが、講義は国家資格合格という関門があるために、一方的に知識を伝えがちであり、学生の主体的な学習姿勢を育むために教員として何ができるかということが課題である。

そのため、平成30年度は、学生と創りあげる双方向の講義のために、教員はファシリテーターとしてどのようにあるべきかを学び、教授法の向上を図るという目的で、帝京大学の学修・研究支援センター長を勤めておられた土持ゲーリー法一先生を招いて講演会を行った。テーマを「ファシリテーターとしての在り方」とし、講演会全体をアクティブな学びの場とすることで、体験型学習、反転授業の手法を用いて展開した。講演会に先立ち、事前学習として講師が作成した動画を視聴し、当日、教員は主体的な学習者として参加して講師によるファシリテーションを受け、学習者としてファシリテーターの役割を体験した。実際には、事前学習であった動画の理解度の確認、グループ討議、討議内容の発表という流れで行われた。

講演会の結果を、参加教員のアンケート回答結果より見ると、主体的な学習者を育むために必要なこととして、学生も教員も共に楽しみながら学習することが重要、教員にはそのための環境を整えることが求められる(授業デザイン)、課題の提示や発問が大切、事前学習が自分の意見の整理になり、活発な意見交換に繋がったというような点が挙げられた。

また、ファシリテーターの役割として求められる点は、教員側も楽しく臨むこと、学生の意見を否定しないフィードバック、言葉選びなどが挙げられていた。

今後は授業デザインや授業展開をする際に役立てるとともに、事前学習の指示方法、発問のアイデアも活用したいと考えている。また、今は各教員レベルでの取り組みであるが、今後は学科全体での取り組みに広げたいと考えている。



事例発表時の関森教授

第2回 全学FDSD研修会

開催日：令和元年9月18日（水）



テーマ：
MUSIC 教育研究検討小委員会 中間発表
— AI-Ready-University を目指して—
武蔵野大学 MUSIC センター長 上林 憲行 教授



テーマ：
トランジションに向けた学生の学びと成長
— 社会で活躍するために—
学校法人桐蔭学園 理事長 溝上 慎一 氏

本日は、MUSIC教育研究検討小委員会の報告とAIの最新動向をご紹介しますとともに、AIが社会的に浸透する中で大学の学びにどう浸透するかをご紹介します。

小委員会のミッションとしては、ICTやAIなどの教育テクノロジーを駆使し、先端的なスマートラーニング環境を全学的に提供すること。また、メディアや人工知能を用いた新しいリテラシーをいかに作るか、それを利用した教育をいかに刷新するかにある。すなわち「AI-Ready-Universityを目指す」ということである。

具体的には、2030年までの長期的なビジョン達成に向け、2021年のカリキュラム改定方針としては、「グローバル×AI×専門力」を掲げ、発展科目群の拡充などカリキュラム拡充、サブメジャーコース化、情報系入試の戦略的活用といったことが学長より示されている。

なお、令和2年4月までに、本学でもAIチャットボットを導入するなど環境整備を行い、BYODキャンパスを目指していく。すでに、武蔵野大学附属千代田高等学院や千代田女学園中学校では、AIを使って生徒一人一人に合わせた学びを提供することができるラーニングマネジメントシステム（LMS）を導入している。

2030年には、卒業・単位制度、評価や学びの場、教育サービスもそれぞれ大きく変わっていくだろう。

入学前教育もクラウドサービスで行う、1年次に情報科目を集中開講する、といった流れを目指す。

AIを用いた教育の重要なポイントは、共感力、社会関係性、信頼といった他者との相互作用、また他のAIツールとの相互作用といった「響創」能力にあると考えている。

今回は、「社会で求められる資質・能力とは」、「資質・能力（ロジカルシンキングなど）を向上させる授業運営について」という2つのテーマについて、お話をさせていただきたい。

そうした資質・能力を育てるためには、アクティブ・ラーニング型授業が必要である。講義をしながらも、学生に自分の言葉で書く、話す、発表するといった「外化」の作業を行わせ、論理的思考力等を伸ばすことを促す。例えば、学生同士でワークショップをさせた際、グループの代表に発表させる時には、自席でなく前に出て発表させるというだけでも、全員に見られながら話す状況は高度な情報処理が必要で訓練になるし、そこで良い発表になるようグループワークにも真剣に取り組めるようになる。また、発言者の方を見て話を聞く、頷く、話の上手い下手に関係なく全員が参加できるよう意識するなど身体性を伸ばし、自分以外の人間と協働できる学生を育てる必要がある。その中で、学生にきちんと向き合っている教員側の身体性も問われる。きちんと学生に聞く姿勢を取らせる、しっかり聞こえる声量で発表させるなどできなければ、一方通行で話してしまうだけでは、いくら講義で良い内容を話しても、いくら外化を行わせても、学生にとって良い学習にはならない。

アクティブ・ラーニングをするクラスサイズとしては50～100人くらいが妥当だろう。アクティブ・ラーニングそれ自体への評価は推奨していない。シラバスに掲げる知識、専門性、資質・能力といった到達目標に到達したかを評価することが重要である。



会場の様子



グループワーク時の様子

第3回 全学 FSDS 研修会

動画配信期間：
令和2年3月30日(月)～4月30日(木)



テーマ：
学祖高楠順次郎先生における「世界」 —その生涯に見る海外とのつながり—

仏教教育部長 石上 和敬 教授

本講では、「世界の幸せをカタチにする。」というブランドステートメントにおいて、学祖高楠先生が国際的仏教学者として常に「世界」とのつながりの中でさまざまな活動を展開した業績を俯瞰し、ブランドステートメントにおける「世界」が学祖の建学の精神に淵源するものであることを確認いただきたい。

高楠先生の海外経験の1番の基本に据えられるのは、25歳から32歳までのオックスフォード大学への留学を基本としたヨーロッパへの留学だ。最初、オックスフォード大学でインド学や比較宗教学の権威マックス・ミュラー先生に師事した。現代ではマイナーな学問のイメージかもしれないが、当時のヨーロッパでインドを研究するというのは、サンスクリット語がヨーロッパの諸言語とルーツを同じとすることが分かってきたことにより、注目を浴びていた分野であった。オックスフォード大学を卒業後、ドイツのキール、ベルリン、ライプツィヒの各大学で学び、さらにフランスなども周り、欧州の東洋学者たちと幅広く関係を結んだ。これが高楠先生の欧州留学のその後につながる財産、活躍の基盤となった。

高楠先生が、欧州の様々な東洋学者たちと交流を深められたのは、漢文まで読める人が欧州にはそうはいなかった中で、漢文資料を十分に理解でき、アジアの事を研究するには漢文が必要だ、こういうことが書かれているということアピールでき、欧州の先生方もこの人は漢文を読めると重宝がったのであろう。

義浄『南海寄帰内法伝』や『観無量寿経』を漢文から英訳し、こうした漢文資料に基づく研究が業績となった。漢文が読めるという特性を生かし、ヨーロッパの学会にさまざまな貢献をなされた。

また当時、インド学となると、仏教の事だけを勉強すればいいという風潮があったが、高楠先生は欧州留学で学

んできたことを受けて、インドの仏教を本当に理解しようとするならば、仏教だけでなく、ヴェーダやバラモン教など広くインドの思想を学ぶことが、実は仏教をより深く理解することになるという考えを大切にされた。

日本に帰国後、東京大学を中心にインド学、仏教学を牽引していく中で、その方針は受け継がれていった。

欧州留学から帰国後には、末松謙澄通信大臣（伊藤博文の娘婿）の秘書官を務めた。4か月の在任であったが、この間に人脈を広げたものと推測される。

また、マックス・ミュラー先生の蔵書は、高楠先生の尽力により、岩崎久弥男爵が購入し東大図書館へ寄贈された。当時イギリスの様子が分かるような書籍が日本になかったことから、マックス・ミュラー夫人や、同じ門下のゴルドン婦人らとともに、英国の書籍10万冊を日本にもたらし、東京市立日比谷図書館に収めることもした。

そして、京橋区に中央商業学校を興し、校主となったほか、バラモン教の文献を翻訳することにより、仏教を正しく理解していくことにつながるという目的から『ウパニシャット全書』の日本語訳も行った。

そして、高楠先生の一番大きな業績と言えるのは『大正新脩大藏経』全100巻の編纂の総責任者を務められたことだ。お経というのは昔からたくさんあるわけだが、『大正新脩大藏経』が優れており、信頼されているのは、写経したものや印刷したものなど色々な版がある中で、それらを見比べて作られたという点である。

今回の話で、高楠先生が国際的仏教学者として活躍され、海外とのつながりも幅広く深いものを持っておられたこと、そういった国際性という部分が、ブランドステートメントの「世界」という部分につながっている、学祖に由来するということをご理解いただけたらと思う。

学祖高楠順次郎先生における「世界」 1



学祖高楠順次郎先生における「世界」 15



『武蔵野女子学院五十年史』より
(昭和二年ころ)

学生FD

学生FD

開催日：令和元年9月10日（火）

テーマ：
理想の授業について考えよう

サブテーマ：
授業理解度が向上するための理想の授業
授業の予復習時間が増加するための理想の授業

趣意

現在、日本の大学では様々な形での教育改革が求められており、今回の学生FDは学修者本位の教育をつくり上げることが目的である。また、武蔵野大学として、学生一人ひとりが学び、成長し大学を巣立っていくことを求めており、そのためにも、学生に教育改革に参加してもらい、教職員とともに協力してより良い大学を作りたいことを望んでいることなどが北條教務部長より説明された。



教務部長 北條 英勝 教授

タイムスケジュール

開会挨拶	5分	北條教務部長
運営説明	10分	当日の運営について説明
自己紹介&役割設定	11分	自己紹介：1分×5～6名 役割設定：5分
グループディスカッション	50分	25分×2
まとめ	5分	発表準備
休憩	10分	
発表	15分	3グループ発表 5分×3グループ
振り返り	12分	各グループ 2分×5～6名
総括	5分	北條教務部長



グループ分け

グループ名	学生	教員	コーディネーター	総人数
Aグループ	遠藤 翼さん（文学部日本文学文化学科4年） 村松 波さん（工学部数理工学科2年） 島田 樹さん（法学部政治学科2年）	三次 真理 准教授 （看護学部看護学科）	間中 和歌江 准教授 （教養教育部会）	5名
Bグループ	王 博さん（グローバル学部グローバルコミュニケーション学科3年） 矢部 魁一さん（人間科学部人間科学科2年） 岡本 吉香さん（看護学部看護学科2年）	高橋 大樹 准教授 （経営学部経営学科）	楊 昆鵬 准教授 （文学部日本文学文化学科）	5名
Cグループ	片田 綾音さん（文学部日本文学文化学科3年） 杉田 光さん（教育学部教育学科3年） HA ANH THU さん（経済学部経営学科2年） 渡部 愛梨さん（看護学部看護学科2年）	神吉 宇一 准教授（言語文化研究科）		5名

テーマ：理想の授業について考えよう

サブテーマ①：授業理解度が向上するための理想の授業（以下はグループごとの主な発言内容）

A グループ
<ul style="list-style-type: none"> • 教員と学生が交流し、互いの熱量を伝え合う場があることが重要である • 教員は、授業の展開や受講を推奨する学生等の情報を発信することが重要である • 学生は、教員からの情報を元に、自らの授業への適正性、授業内容等を理解した上で受講を判断することが重要である • 理想の授業へのポイントとして、分かりやすいシラバス作成をすること • レポート等に対する結果へのフィードバックを学生へすること • 学生の興味を喚起するための工夫をすること
B グループ
<ul style="list-style-type: none"> • 学生の意欲を引き出す授業であることが重要 • 授業への意欲を引き出すために、授業の意義を理解させる工夫、授業時間に対する工夫、予習復習ノート等の評価方法に対する工夫が必要 • 宗教に関すること等の学生の多様性に配慮する取り組み等が必要
C グループ
<ul style="list-style-type: none"> • 授業内容に関して、自分との繋がり、将来との繋がりを意識させ、興味を持たせることが重要である • 興味を持たせる工夫として、豆知識等の具体的な事例を取り入れること • 学生にノートの作成を促すこと • 前回の授業内容に関する小テストの実施 • 参加型授業の実施や自らの考えをまとめるようなレポートの作成等が必要

サブテーマ②：授業の予復習時間が増加するための理想の授業（以下はグループごとの主な発言内容）

A グループ
<ul style="list-style-type: none"> • 授業を1時限で完結させることにとらわれず、内容を次回に持ち越すことにより、学生自らが振り返りや考察を行い予復習に繋がる
B グループ
<ul style="list-style-type: none"> • コミュニケーションが多い授業では予習の必要性を感じる • 学生に対して、予習の意義や内容を説明することが重要である
C グループ
<ul style="list-style-type: none"> • 予習の必要性が理解できず、予習よりも復習の方が重要性を感じる場合がある • 復習を促すためには、レポートや小テストが有効である

講評・総括

今回の学生FDは、想定以上に率直に、真面目に、建設的な話がなされ、教員だけでなく学生にも学びや発見があった。また、参加者には今回の内容を関係者に共有していただきたい旨や今後も全学的・定期的な形で今回のような取り組みを進めていきたい旨が北條教務部長より述べられた。

実施後アンケート

学 生	教 員
<ul style="list-style-type: none"> • 定期的に学生FDを実施してほしい • 学部・学科で学生FDを実施してほしい • 教員と学生が交流する機会を設けてほしい • 教員がどのような考えで授業を展開しているか知ることができた • 他学部の学生から意見を聞くことができた 	<ul style="list-style-type: none"> • 今回のような学生FDにはより多くの教員が参加すべき • 学部・学科で実施するとより理解が深まる • 他学科の学生とFDを実施したい • 他学科の良い授業例を知りたい • 他学科の学生からの満足度や評価の高い授業に参加したい



目的別FD

目的別FD研修会

開催日：令和元年12月12日（木）



テーマ：
来年度シラバスの作成について
—学修者本位の教育への転換に向けて—
教務部長 北條 英勝 教授



テーマ：
外国語による教授方法について
国際センター長 Donna Weeks 教授
授業改善トライアル共同参加者
法学部 政治学科 中村 絢子 講師

シラバスの作成における目指すべき姿について、これまでは「何を教えているのか」が大事なトピックであったが、現在では「学修者がどのような力をつけているか」という教育の質が問われる時代になり、「学修者本位の教育への転換」が大学に求められている。そこで、学修者が学修成果を実感することのできる教育の実施のため、シラバスの表記もDPで示されているものであると分かりやすい。必要な記載事項として、準備学修（予習・復習）、課題のフィードバック方法、授業における学修の到達度目標、成績評価の方法・基準などが挙げられる。

今年度のシラバスを見ると、例えば岡野先生の「環境英語2」では、Learning Portfolioに学習の進捗を記録していくこと、予復習についても具体的に記載されている。評価についても予復習と連動し、Learning Portfolioの提出により、全体の10%の割合で配分されている。学修者がどのように学修を進め、力をつけているのかを捕捉できる形に組み立てられており、学修者本位という考えに基づいていると言えるだろう。

また、シラバスの項目については、実務経験のある教員等による授業科目の配置が定められたことにより、実務経験がある場合、その旨を記載するための項目を新設した。さらに、「ICTの活用」、「ノートPC必携」、「レポートのオンライン提出」などの項目の記載が必要となる。

私は平成30年度、授業改善トライアルの一つとして、「Speak up! Politics in English」という授業を、中村先生とともに受け持った。本科目を、「英語を学ぶ」というより、政治学を「英語で学ぶ」と位置づけて考えた。教材としては、海外の大学の政治学科の一年生が使う政治学思想の定義などを英語で簡単に説明しているテキストを活用したり、英語の時事ニュースを取り上げ、その印象や感想をディスカッションさせたりした。ディスカッション後に代表の学生に発表してもらおうと、最初はメモを見ながら自信なさそうな発表だったが、最後の授業では、メモがなければまだ言えないものの、緊張感は減ってきているように見受けられた。

学生の授業評価アンケートによると、「苦手意識が改善した」、「今後英語を基本言語とする授業があれば参加したい」という問いに「とてもそう思う」、「そう思う」と回答した学生の割合が50～60%以上となり、教員として概ね満足いくものとなった。

課題としては、本授業はトライアルで全4週8回の授業であり、学生に効果を実感させるには短期間であったため、新科目として開講する際には、今後どのレベルをターゲットとするか、学科カリキュラム上どこに位置づけるかといった点に考慮すべきである。そして、学生に外国語で専門科目を学ぶことにより何が得られるのか、日本語のみで学ぶのとどう違うのかを明示することが重要と考えている。

1. シラバスの作成方法について①

◆目指すべき姿

【学修者本位の教育への転換】

- 「何を教えたか」から「何を学び身に付けることができたか」への転換
- 学修者が学修の成果を実感できる教育の実施
→DP1～DP4の表現を参照

◆シラバスに必要な記載事項

- ・準備学修（予習・復習）
- ・課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法
- ・授業における学修の到達度目標及び成績評価の方法・基準
- ・卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連
- ・当該授業科目の教育課程内の位置付けや水準を表す数字や記号（ナンバリング）
- ・実務経験のある教員等による授業科目の配置
- ・授業における「ICTの活用」について



1. 国際化に向けての方針①

1. 外国語学習の充実

〈施策〉

- ・インターナショナルレクチャーズの充実
- ・レベル別英語力強化プログラムの検討
- ・「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」への転換
⇒SDGs／専門科目を英語で学ぶ^①
- ・英語に偏重せず、より広い視野を身につけるための手段として第二外国語科目を充実

【目標】

- ・専門科目における、英語（その他外国語）の参考文献・資料等利用率100%（2030年）
- ・第二外国語を2年次まで学ぶ学生数の増加



令和元年度 授業評価アンケートを踏まえた 学科FDの推進について

〈授業評価アンケート概要〉

- 教育の質保証のため定量、定性的評価、学生の実態把握を行う。また、学科の教育改善に資する情報、分析観点を増やし、各学科のFD活性化につなげる
- 原則、全学部・全学科の科目を対象に実施する
- 各学期のアンケート実施期間中の授業時間内で実施（所要時間約10～15分）する

■ 授業評価アンケートを踏まえた学科FDの目的

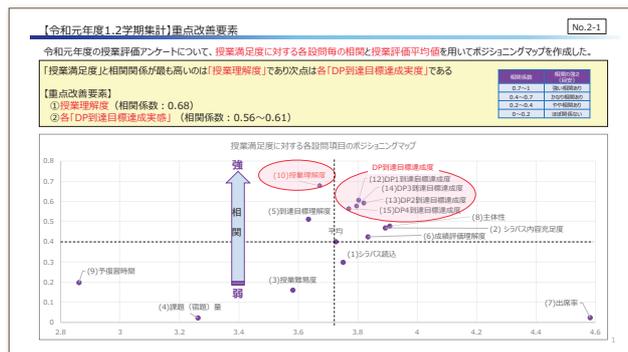
科目ごとの学修成果の達成状況を確認する

- 現状を分析し、改善策を学科内で検討する
- 教育の質向上のための課題、ノウハウ、スキルを共有する

学科の教育課程全体を通した学修成果の達成状況を確認する

- 科目の体系的・適応度を検証し、教育改善につなげる
- カリキュラム再編成に向けた検証を行う

【参考】学科FD実施のための授業評価アンケート分析資料（一部抜粋）



■ 実施内容

実施期間

令和元年11月7日（木）～令和2年1月15日（水）

活用データ（データ内容は、令和元年度1・2学期授業評価アンケート結果）

- 授業評価アンケート基礎集計：各設問の回答結果の学科別基礎集計
- 重点改善要素：授業満足度と各設問との相関から、「重点改善要素」をピックアップした資料
- DP・到達目標管理表（※）に対する授業別評価平均値：シラバスに記載されているDP1～4の到達目標の達成状況など
※学科DP実現のため、科目ごとに、学科DPの能力分類に対応する関連度を可視化し、それに応じた到達目標を設定している

■ 実施報告（一部抜粋）

（1）令和元年度武蔵野大学数値目標の達成状況の検証

全学で設定した検証項目に基づき、各学科がFDを行ってまとめた報告書より、目標を達成した場合には達成要因の理由、未達成の場合には改善策が明確に述べられているもの、学科特性や個別の授業の範囲に留まらず他学科の参考となるようなものを一部抜粋した。太字は、特に具体的な対策と思われる箇所。

① 授業外の学習時間

[] 内は学科等略称

〈具体的改善案（未達成要因の改善策）〉

- その日の授業内容の要点を振り返る趣旨の課題を出したり、反転授業のように事前の調査・考察を求めたりすることをゼミ以外でもより積極的に取り入れる。[日文]
- 学生に発言を促す、グループワークを多用するなどアクティブラーニングの推進を今後も根気強く続けていくことで、予復習の必要性をまだ十分理解していない学生の意識変革を促していく。[GB]
- 講義終了時に次回のテーマ・課題を示唆し、現在の状況や問題点についての学習につなげる。[法律]
- 知識マップを作成し、各科目で取得できる知識、スキルを整理した上で、可視化し、シラバスに反映することについて進めようとしているところである。[DS]
- 令和3年度から新設されるSDGs関連科目を有効に活用することで、低学年への働きかけを強化したい。予復習が必須となる実習・演習系の科目を選択必修化してすべての学生に履修させ、授業外学修を習慣化させることについては、今後も検討を続けたい。[人間]
- 自主学習できるような内容を授業で提示（講義中に何をどうやって予復習すればよいかを具体的に指示する）。[数理]
- 授業外の学修時間を上げるには、協働作業の場所の確保も必要である。また、そのサポート役割としてのTA・SA確保も同時に必要となる。[建築]
- ふりかえりのレポート作成を授業外の課題としたが、そのレポートをより良く書くためには、学習支援システムに収められた参考資料や授業者による解説を読んだり聞いたりする必要があるという仕組みにした。[教育]
- 教員に対する問題提起として、実際に双方向授業を実施している教員から実施方法を紹介していただき、授業方法に関する提案を行っていただいた。[薬]
- シラバスの授業計画に具体的な予復習の箇所や量を書き込み、またそれをもとにした小テストを実施することが有効と考える。[教養（英語）]
- 自動採点システムやビデオ教材を活用した自己学習、学習した内容を要約する課題などを与えることで、学生が授業外で時間をかけて学ぶ機会を増加する。[教養（情報）]
- 毎回の授業で授業外に取り組み課題を出題しており、今後も同様の授業計画のもとに授業を実施することで十分な授業外の学習時間が確保できるものと考えられる。[教養（日本語リテラシー）]

② 授業の理解度

〈現状分析（達成要因）〉

- 知的な面白さと喜びを、学生に届く言葉で伝えるための努力を続けてきた成果だと考える。[日文]
- なかでも「とても理解できた」学生の割合は32.0%と全学平均13.1%を大きく上回った。このことは、主としてGB学科留学生に学力レベルの高い学生が多く在籍していることを示唆している。しかし、学科（クラス）内における学力格差（英語力格差）の問題は学科創設以来の悩ましい課題である。かといって、授業中に成績劣位者へのフォローが過ぎると、成績優秀者の満足度低下を招き易い。入試対策、英語力強化策を含めた総合的な対応が望まれる。[GB]
- 授業外の学修時間についての目標が達成できていないのに、授業の理解度の目標が達成できていることこそが問題であるという認識を持つべきである。[人間]
- スモールステップで学修できたため、わからない点を先送りせずに理解していった点。また、グループでの議論も、他者の意見を知ることで自分がその課題を理解できているかの確認と、自分の意見を見つめ直すことに繋がった。本科目の履修者のオフィスアワーの来訪も多かった。課題点は、議論が固定グループでなされたため、変化がなかった点。[教育]
- 難しい技法をやさしく解説し、初めての人でもできる方法を教え、学生自身に、できた喜びを体験させる。[教育]
- 授業評価の高い教員の授業例からは、①【授業内容・教材の工夫】テキストを超えた教材やその提示の工夫を行う、②【学生との応答性強化による学生の主体的授業参加の促進】学生の机間巡視を密にする、グループワークのそれぞれに必要なに応じて介入する等の、教員と応答的に授業を進め、学生が自ら思考し授業に主体的に参加する工夫を行っている。[こども]
- 学生が適切に自己評価できるように、自分が何を学んだかわかるように学びの内容を可視化し、また、自己評価の方法を教育する必要がある。[看護]
- 初修外国語は、知識が増えてゆくにつれて学生の意欲が次第に減退していく傾向がみられる。このため、語学的な知識のみならず、文化的な興味関心を引き出すような教材を提供するよう心がけている。[教養（外国語）]
- 令和元年度に設計したコンピュータ基礎1では、従来のツールの使い方を学ぶ授業から、学生が問題を発見し、それに必要なツールを選択して解決する主体的な学びの授業へと変革した。これにより、学生が目的を持って能動的に学び、教員また学生同士が互いの知識を高めることになったと考える。令和2年度は授業で扱う教材のバリエーションを増やし、スキルのある学生に対してより高度な教

材を提供することで、自主的に新たな学びを得る機会を増加させる。[教養（情報）]

- 「インターンシップに参加したい」という明確な目的を持つ受講生が多いこともあり、インターンシップで必要とされる内容の講義を理解できた受講生が多かったのではないかと思います。[教養（キャリア）]
- 日本語リテラシーの科目運営においては、**全教員が共通の教材（教科書・PowerPointスライド）を用いて授業を実施している**。PowerPointスライドは随時学生の理解を助ける形での更新が行われており、より良い理解に向けた教材の更新を続行する予定である。[教養（日本語リテラシー）]

〈具体的改善案（未達成要因の改善策）〉

- 理解度が芳しくない科目においては、**e-learning機会の増加、演習問題の増加、確認テストの導入とフィードバック**を通して、理解度向上に努める。[経済]
- 数学能力を必要とする科目は悪い。教員個人の努力で修正できないため、**高技能TA・SAの雇用等、より上位次元での検討が必要**。[経営]
- カリキュラムとして応用と実際のスキルを行き来しながら実践を知るような構成であることから、**必ずしも1教科での理解度を見るのではなく、総合的に知識・スキルレベルを考える必要がある**と考える。学生に対して、**カリキュラム全体の意義の周知**、および上記のような科目間連携によるサポートを進めることを確認した。[DS]
- 概念と具体例を合わせて説明**したり演習問題を取り入れたりして、理解を促す。[環境]
- クリッカー等の授業アンケートで学生の理解度を毎回チェック**しながら進める。毎回各項目の理解度を提出させていたが、それを活用して、理解度が低い事項に関して復習レポートを提出させる。[数理]
- 評価が低い授業で、非常勤講師の場合は**担当の専任教員からのアドバイス、調整を念入りに行うこと**とした。[建築]
- 低学年では、毎年一定数の留年学生が存在しているため、1年生に対する**学修支援プログラムも毎年改良を行いながら実施**している。また、2・3年生に対する補講などの実施も必要であると考えている。[薬]

（2）DP・到達目標管理表の達成状況の検証

各学科報告書より、理由が明確に述べられているもの、学科特性や個別の授業の範囲に留まらず他学科の参考となるようなものを一部抜粋した。太字は、特に具体的な対策と思われる箇所。

① DP1 この授業の〈知識・専門性の到達目標〉について、達成できたと思いますか。

課 題（現状分析）	具体的改善案
本項目について授業評価アンケートから講義科目が演習科目に比べて低めの評価であるが、全て3.3以上であり、ほぼ到達目標をクリアしているかと思われる。[DS]	具体的な課題が提示される演習系に比べ、講義系では能動的に学習するグループワークに慣れずに戸惑う学生がいたが、 オンラインツールでの学生サポートを充実 しつつ、 グループ学習、能動的学習スタイルを維持 していく。[DS]
・学修時間が少ないと本人たちが評価している。 ・ある授業ではクリアしているが、 後続の授業での継続性に問題 がある。[数理]	科目間の知識の連携 のために、学科内で授業内容のすり合わせを行う。[数理]
(※DP1～4共通) ・評価が低い科目が非常勤講師担当であった。 ・毎年、学生の性質も変わっているので毎年同じ授業運営では対応できないことになる。[建築]	(※DP1～4共通) ・評価が低い授業で、非常勤講師の場合は担当の専任教員からのアドバイス、調整を念入りに行うこととした。 ・ 学生も変化するので、教員側も常に変化が求められている ことを認識することとした。[建築]
106名の授業なので、一人一人を丁寧にみるのが困難ではあった。[教育]	多人数の授業でも、毎時間討論させ発表させる形式を確立し、実施 することが大切である。座席を指定することにより、グループワークの質を高め、発表の機会の公平性を保つことができると考えられる。[教育]
情報科目で修得すべき知識は増加しており、学習する領域を拡大する必要がある。また実データを扱う際に、学科の特徴を含むなど 学生の興味、関心に基づいた教材を設計 する必要がある。[教養（情報）]	令和2年度は、近年注目されているメディアリテラシーおよび人工知能の知識を習得させる。さらには情報収集および分析、表現に関する専門的な科目、プログラミング科目の導入により学習の幅を増加させる。授業手法においては、 授業内で提供しきれない内容について、メディア教材を活用して自主的な学びをするよう指示 する。[教養（情報）]

② DP2 この授業の〈関心・態度・人格の到達目標〉について、達成できたと思いますか。

課題（現状分析）	具体的改善案
達成できたと思わない学生の割合が26.0%もいることは課題である。[GB]	1 学年55名の小さな学科で毎回ほぼ同じ顔ぶれで授業を受けていると、自分の立ち位置が固定化され易くなる。 DP2を高めるには、様々な個性と接しながら自身を磨いていくことも必要である。 他学科科目の履修奨励や、英語語学科目での他学科（GC・JC）との合同開講などを模索していきたい。[GB]
学生の意欲のばらつきが大きい。[経営]	学修の狙いや、授業外学修の意義をより丁寧に説明する。[経営]
会計を中心とした学習のため、会計不正やアカウントビリティーといったニュースで取り上げられる課題に接する機会が多い。[会計]	難易度を下げずに講座のレベルを維持するために、例えば、新聞記事の抜粋など、実際に社会で行われている事例を取り入れ、学生の関心を惹きつける。[会計]
学生の態度やモチベーションによって、共感につながる場合もあれば、単に面白かったで終わってしまう場合もある。[社福]	関心・態度・人格の涵養は、共感的態度が重要となるため、 事例や映像教材に加え、学外等での体験的内容も効果的な導入方法を検討する。 [社福]
【ストレスコントロール力】の獲得は非常に難しい（わからないとすぐに立ち止まってしまう）。[数理]	より具体的な問題へのアプローチと、そこからの課題解決をより意識させ、短期間での進展状況を決めながら進める。[数理]
多人数の授業で発表の回数は減るが、その中で充実感を与えていくこと。[教育]	主体的に学ぶ意欲を育成することが大切であり、 授業の中で自ら考えたことを人に伝えることができる機会を多くつくる。 [教育]
学生によって意欲に差があり、 意欲が低めの学生に対しての指導・フィードバックが不十分 であったと考える。また、 より学習したい学生に対して情報の提供が不足 していたので改善する必要がある。[こども]	リアクションペーパーなどで学生の関心等を確認し、それを踏まえて次の授業を計画する。また、より学習を広げたり深めたりできるように参考文献等を紹介するようにする。[こども]
到達目標が抽象的で理解しにくい。テーマによっては、「他者と自己を理解する」とことと直接的に結びつかないものもある。[教養（基礎セルフ）]	到達目標の抽象性を下げ、より分かりやすいものにする。 [教養（基礎セルフ）]
専門課程での学習や、社会に出てからの生活に、一定のポジティブな効果を与えたい。[教養（発展セルフ）]	SDGsなどの内容に対応して、 大学での学問が実社会とどう結びつきうるのか 、その点の問題意識を自覚的に持って授業に臨むようにしたい。[教養（発展セルフ）]

③ DP3 この授業の〈思考・判断の到達目標〉について、達成できたと思いますか。

課題（現状分析）	具体的改善案
「どちらともいえない」と回答した学生の割合が24.1%あり、この層の学生への働きかけと、そのことによる全体の底上げが必要である。[日文]	ゼミからの作品の発信、ポートフォリオの制作・公開をこれまで以上に推奨することは、日本語の思考力、発想力、説得力を鍛える上でも有効であると考えられる。[日文]
社会への関心を高め、問題点の理解や政策眼を養うような指導に努める。[法律]	調査・研究対象について、 PowerPointや動画などを使用してプレゼンテーションを行う機会を増やす。 [法律]
学生が論理的思考・判断力を高めるためにはテキストのみに頼るのは難しい。[教養（英語）]	上から中位クラスにはテキスト以外に予習復習の時間を利用して行う、学生の思考・判断力を高めるための教材を考える必要がある。[教養（英語）]
ビッグデータの時代といわれるように、多種多様な情報が混在している中では、それらのデータを加工し、可視化し、課題を発見するスキルが求められている。そこで実データを用いてこれらの体験を授業において提供する。[教養（情報）]	令和2年度の情報分析・創出・表現技法においては、必修科目で学んだ表計算ツールのスキルを発展させ、実際の店舗の売り上げデータなどを活用して リアリティの高いデータを分析する 。更に分析を通じて発見した 課題や解決策のアイデアを他者に伝えるための、納得性の高い論理的な表現手法を修得 できるようにする。[教養（情報）]

④ DP4 この授業の〈実践的スキル・表現の到達目標〉について、達成できたと思いますか。

課 題 (現状分析)	具体的改善案
どの科目も3.5以上の評価であり、ほぼ到達目標をクリアしているかと思われる。[DS]	各科目ともグループワークでの学習、プレゼンテーションを主眼においていたため、高い評価であったと考えられる。2年次以降の科目についてもグループワークでの協調学習、能動的学習、プレゼンテーションを主眼においた学習スタイルを取り入れていく。[DS]
発表やアウトプットの機会が少ない。[環境]	プレゼンテーションなどの機会を増やす。プロジェクト科目で、学外の専門家などと連携して新たなスキルを獲得できるよう内容を工夫する。[環境]
【語学力・コミュニケーション力】において個人ごとのばらつきがみられる。[数理]	ゼミ内での文献紹介などの機会を増やしていきたい。[数理]
グループ活動で実際にどのような議論が展開しているのかが見えにくく個々への対応が不十分であったと考える。[こども]	ドキュメンテーションの作成、ICT機器などを活用しながら、活動の可視化のアーカイブ化にも取り組んでいきたい。[こども]
特に下位クラスで英語の実践的スキル・表現を求めるのは学生のニーズと学力に一致しておらず、授業運営は困難である。[教養 (英語)]	下位クラスにはごく基礎的な英語表現力(会話・英作文)を繰り返し教えることで、学生の実践的スキル・表現力を高めていく必要がある。[教養 (英語)]

授業改善小委員会の活動

令和元年度授業改善小委員会メンバー

北條 英勝	教務部長	和賀 信之	教育改革推進室長
伊藤 泰彦	学生部長	金子 亮太	学務課係長
三浦 裕子	日本文学文化学科 教授	鳥井 幸望	武蔵野学務室係長
楊 昆鵬	日本文学文化学科 准教授	並木 康子	学部事務課員
深谷 健	政治学科 准教授	足立 京子	教育改革推進室主査
松岡 佑和	経済学科 准教授		
積田 淳史	経営学科 准教授		
泉 明宏	人間科学科 准教授		

目的 問題意識に基づく挑戦的な授業を設計・実践・評価し、体系的に知見を蓄積する。

活動

第1回：令和2年2月18日(火)「令和2年度前期授業トライアル査定について」
「令和元年度授業改善トライアルの実施報告」
「令和元年度FDレポート(報告書)制作企画について」

【トライアルの概要】

- 授業改善に向けた取り組みであれば、その内容・手法は問わない
- 意欲的な新たな試みに対し、取り組みの成否は問わないが、効果や変化に対する報告を求める
- 本トライアルの実施計画に基づいて授業計画を立て、シラバスを作成する
- 学内FDやFDレポート等を通じ、本取組について学内外へ案内する
- 1申請に対する支援額の上限：受講生数に応じて最大20万円とする

【トライアルに求める成果指標】 下記(1)～(3)の全てあるいはいずれか

- (1) 授業内容の理解度を深める
- (2) 学問的、知的興味・関心の広がりにつながる
- (3) 授業以外の学修時間の伸びにつながる

【令和元年度 授業改善トライアル選定授業一覧】

No.	教員名 (敬称略)	トライアル名	対象科目名	対象学科・学年 開講学期
1	Donna Weeks 小島 千枝	International Lectures : 法律学科と政治学科による合同合宿	International Lectures (Law)、 International Lectures (Politics)	法律学科・政治学科 2・3・4年 2学期
2	野口 友紀子	学生が授業に臨む姿勢を変えるテ キスト活用の取り組み	現代社会と福祉	社会福祉学科 4年 1・2学期
3	三次 真理、高田 幸江、大井 千鶴、 山本 祺子、三觜 久美子、諸田 直実	慢性疾患患者の病の軌跡を捉えた 看護支援の学習を促すアクティブ ラーニング	成人看護論 2 B	看護学科 3年 1学期

【令和2年度前期 授業改善トライアル選定授業一覧】

No.	教員名 (敬称略)	トライアル名	対象科目名	対象学科・学年 開講学期
1	藤浦 五月 (コーディネーター) 各クラス担当者：宇野・桑野・小熊・佐々木	共通リーディングノートを用いた リーディング習慣育成とリーディン グスキルの把握	日本語1D	グローバルコミュニケー ション学科・日本語コミュ ニケーション学科 1年 4学期

令和元年度 授業改善トライアルより～授業改善事例の紹介～

トライアル名： 学生が授業に臨む姿勢を変えるテキスト活用の取り組み
 科目名・対象： 「現代社会と福祉」社会福祉学科4年次 1・2学期 火曜1・2限
 担当教員名： 野口 友紀子 教授

●トライアルのねらいと内容

本トライアルの授業改善の目的は、受講生がテキスト(=教科書)を読んでから授業に臨むように仕向けることである。そのために、講義内容に沿った課題を事前に出し、授業開始時に回収して授業内で活用するという手法を試みた。具体的な手順は以下の通りである。

1. 次週の授業内容の教科書の該当ページを伝え、事前課題を前週に学生に提示する。
2. 授業当日の最初に学生の書いてきた事前課題を回収する。1限目は課題に関連することを講義する。休み時間中に、回収した事前課題の予習用紙を確認し、2限目に学生の書いてきた予習内容について取り上げる。学生からの意見を聞いたり、教員の解説を加えたりする。2限目の終わりに、今日の授業を受けての気づきをリアクションペーパーに書いてもらって回収する。
3. 次週の最初に復習としていくつかのリアクションペーパーを取り上げ、教科書の該当箇所を示しながら解説する。

学生にあらかじめ課題を与えて何かを書かせたり、リアクションペーパーを回収したりする方法はすでに多くの授業で取り上げられていると考えられるが、本トライアルは、「教科書を読ませる」ことを主眼にしており、この点が他の取り

組みと異なる。教科書は必要な学びの内容だけでなく、文章としても簡潔でわかりやすいものであり、参考文献も記載されている。これを最大限に活用して学生に力を付けさせたいと考えた。

●成果検証結果

事前に設定した授業改善の目標は「教科書を読んでから授業に臨ませる」こと、つまり教科書を活用した予習習慣の涵養であった。

この成果検証のため、当科目の受講生に対して独自アンケートを実施し、3年次までの授業外学習の状況と当該科目における授業外学習の状況を調査して、授業に関連して授業外学習を行った時間や、そのうち教科書熟読にかけた時間等を比較した【表1】。

この結果、事前課題としてワークシートを課すだけでは授業外学習時間及び教科書を読むのにかける時間の平均値は伸びないことが明らかとなった。その一方で、1回の授業にかける授業外学習時間の最低値(最も授業外学習を行わなかった日の学習時間)が増えたことがわかった。これらの結果から、毎回教科書を読ませ、事前課題を課すことにより、学生が毎週コンスタントに授業外学習を行うようになったことが読み取れる。

【表1 独自アンケート結果】

	授業外学習の平均時間	授業外学習時間のうち教科書熟読の平均時間	授業外学習の時間が最も少なかった日の平均時間
現代社会と福祉	45.98分	22.03分	28.22分
3年次科目	46.98分	23.87分	19.27分

※値はそれぞれ1週間あたり

当該科目は4年次前期の科目であり、就職活動等に時間を取られることを考えると、3年次とほぼ同様の授業外学習時間を保持できたことは評価できる。主題であった「教科書を読む時間」についても、やや下回ってはいるが、3年次とほぼ同等の時間を保持できている。

さらに、授業評価アンケートの結果から、授業外学習時間以外の項目の改善に効果が確認された。

理解度について「とても理解できた」+「理解できた」と回

答した学生は2018年度が35.3%であったのに対し、2019年度は56.4%となった。満足度は「とても満足している」+「満足している」が30.2%から55.3%に伸びた。また主体性については「とても主体的に取り組んだ」+「主体的に取り組んだ」が、31.8%から59.5%となった【表2】。この結果から、教科書の予習を事前課題として授業を運営する方法は、そうでない場合と比較して学生の理解度・満足度・主体性を高めることが分かった。

【表2 授業評価アンケート結果】

	理解度	満足度	主体性
2019年度	56.4%	55.3%	59.5%
2018年度	35.3%	30.2%	31.8%

※値はそれぞれ「とてもできた」+「できた」の比率

● 次年度以降の同科目へ、また他の科目や教員への展開可能性

教科書を事前に熟読させるための事前課題については、次年度以降も取り組みたい。今回の結果を踏まえ、ワークシートの内容を検討し、教科書に加え参考文献なども使った知識の習得を期待して、自分の考えの展開が記入できるような内容に改良することを考えている。

他の科目や教員への展開可能性については、学生に教科書を有効活用させるためにも、自宅で読ませる仕組みとして事前課題のワークシートを課すのはよい方法と思われる。初年次から複数の科目で同様の取り組みを行うことで、学生は様々な授業でコンスタントに予復習（授業外学習）を行うことになり、結果的に授業外学習が習慣化することも期待される。ただ、ワークシート・リアクションペーパーを毎回回収して提出の有無をチェックする作業はかなり負担が大きいため、事務作業補助としてSAなどの活用を推奨したい。

● 受講学生の声（授業評価アンケートの自由記述より抜粋、一部要約）

【肯定的な意見】

- 自分で考える機会になった。とても勉強になった。
- みんなの考えが知れて、とても参考になる授業だった。
- 毎回の予習の設問がとても考えやすい内容であったので、わかりやすかった。

【否定的な意見】

- 課題の設問がアバウトすぎたので、もう少し指定してほしい。
- レジュメがまとめられすぎていて、書き込みづらかったし覚えづらかった。

● 担当教員総括（授業改善トライアルに採択され、実施してみた感想等）

授業運営上困ったことは2点あった。第一にワークシートを当日の授業開始前に回収するのにかなり時間がかかること、第二に授業開始前に回収してしまうと、授業中に受講生の手元がないため、教員が授業中に紹介したワークシートの内容を自分の意見と比較してとらえられないことであった。そのため、ワークシートを授業終了後に提出させることに変更し、これらの問題点を解消した。そうすると、ワークシートをやったこなかった受講生が授業中に記入してしまうという問題が発生したが、これについては解決の手立てがなかった。

ワークシート回収を授業終了後としたため、授業中にワークシートを使って、近くの座席の4～5人とグループになり、ワークシートの内容の意見交換をしてもらうようにした。ワークシートを事前にやらないと授業に参加しにくい仕組みにしたのだが、白紙のワークシートを持ってきて授業中に記入する受講生は最終回まで存在した。

受講生について気づいたことは、教科書をみるとラインを引いたり、書き込みをしたりしている者もあり、自宅でワークシートに取り組みながら、教科書を読んだ形跡がみられたことであった。また、ワークシートをもとにグループで意見交換する方法は、自分の考えを述べ、他人の考えを聞く機会であるため、受講生にとっては授業に参加したという実感ができたのではないかとのことであった。

教員側に授業に関する新たな取り組み案があっても、それが膨大な手間を要するものであればためらわれる。今回、提出物の有無のチェックをアルバイトにやってもらえたことで、授業改善につながったと感じている。

令和元年度 学科FD実施報告

文学部 日本文学文化学科	
日時	令和元年6月24日(月) 16:20~17:50
講師	アメリカ・ケニヨン大学近代文学言語学部 (Kenyon College・Department of Modern Languages and Literatures) 助教授 謝開 (Kai Xie) 氏
テーマ	アメリカの大学における日本文学文化教育および学生交流の可能性ーケニヨン大学を例にしてー
目的	謝先生に、ケニヨン大学近代文学言語学部における非日本語ネイティブの学生に対する日本文学文化教育について紹介・報告して頂き、それを参考として、本学文学部日本文学文化学科の教育、特に留学生の受け入れ態勢の質向上に向けての課題と解決策について検討した。
日時	令和元年11月4日(月) 16:20~17:50
講師	日本文学文化学科 楊 昆鵬 准教授
テーマ	あはせばしなのいかに歌と詩一和漢聯句を読んでみるー
目的	令和元年6月2日付で第28回柿衛賞を受賞した楊先生を講師に招き、和歌・連歌に関する知識と、漢詩文の素養を必須とする極めて高度な日本文学のジャーナルである和漢聯句の特質と魅力について講演して頂き、文学部各教員が自らの専門とは異なる分野の最新の学術的知見に接して知的な刺激を受け、視野を一層広げる貴重な機会とした。
日時	令和元年12月16日(月) 13:00~14:30
講師	日本文学文化学科 寺島 恒世 特任教授
テーマ	『百人一首』はなぜ面白い
目的	後鳥羽上皇をはじめ、中世和歌研究の第一人者である寺島恒世先生を講師に迎え、今も多くの人に親しまれる『百人一首』の特質と魅力について、『百人一首』や『百人秀歌』および周辺資料の精緻な分析に基づき、近年の三十六歌仙絵についての研究成果なども踏まえて講演して頂き、文学部各教員が自らの専門とは異なる分野の最新の学術的知見に接して知的な刺激を受け、視野を一層広げる貴重な機会とした。なお講演は一般にも公開され、多くの来場者があった。
日時	令和元年12月16日(月) 18:00~19:30
講師	一 (三浦一朗学科長から授業評価アンケート結果の報告とFDの目的についての説明を行った後、課題と改善策について学科内で検討)
テーマ	授業評価アンケートの結果を基にした日本文学文化学科FD
目的	授業評価アンケートの結果を基に、科目ごとの学修成果の達成状況を確認し、課題を可視化して学科内で共有した。その上で、改善策を検討した。検討結果は「令和元年度学科FD実施報告書」にまとめて提出した。

グローバル学部 グローバルコミュニケーション学科	
日時	令和2年3月4日(水) 14:00~15:30
講師	グローバルコミュニケーション学科 饗 殿武 教授 教養教育部 遠藤 祐介 教授
テーマ	グローバル学部における中国語教育の取り組みと改善点

目的	中国語1~3と資格演習ならびに中国研究、日中翻訳と通訳演習などの科目を担当するグローバル学部教員及び非常勤講師によるミーティングを行う。ミーティングの目的はカリキュラムと授業運営に関する諸問題(出席と遅刻などの基準、カリキュラムの進捗度、達成目標、統一試験など)の説明と議論であり、特に2020年度における中国語教育の推進策と改善点およびアクティブラーニングなどの課題について、議論を行い、情報共有を図る。
日時	令和2年3月18日(水) 10:30~12:30
講師	グローバルコミュニケーション学科 古家 聡 教授 同学科・教務担当 小塚 高志 講師 同学科・英語科目コーディネーター 石黒 武人 准教授
テーマ	グローバルコミュニケーション学科英語科目運営方針について(英語科目担当者講師会)
目的	英語科目(English for Qualifications)の担当教員を対象にし、グローバルコミュニケーション学科の英語教育における方針、カリキュラムにおける当該英語科目の位置づけ、英語科目の授業運営に関する方針、英語科目と全員留学およびGTECとの関係等について情報共有を行う。さらに、前述の内容に関する質疑応答を行い、また、英語科目担当教員同士がお互いの考えや実践を共有できる時間を取り、今後の授業運営に役立てる。
日時	令和2年3月23日(月) 13:00~15:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 英語科目コーディネーター Anne C. Ihata 教授、Albert Zhou 教授
テーマ	GC/JC English courses taught by mainly native English speaker teachers
目的	Practical Communicationならびに Integrated Skills for Communication、Advanced Skills for Communicationの各コースに所属するグローバル学部教員及び非常勤講師によるミーティングを行う。ミーティングの目的はカリキュラム及び授業運営に関する諸問題の説明と議論であり、特に全員留学の検証を踏まえスピーキングやライティングの強化に関する議論の推進である。また、すでに各コースにて一定の比重を占めるSDGsの受講生への普及について情報の共有を図る。

グローバル学部 日本語コミュニケーション学科	
日時	令和2年2月4日(火) 13:00~15:00
講師	日本語コミュニケーション学科 専任教員
テーマ	2019年度の振り返りと2020年度の教育について
目的	2019年度担当科目における課題と2020年度からの学科方針の変更点の共有する。

グローバル学部 グローバルビジネス学科	
日時	令和元年12月17日(火) 13:00~14:30
講師	ー
テーマ	2学期授業アンケート結果について
目的	授業アンケート結果を分析し、更なる学修レベル改善に向けた方策を検討する。
日時	令和2年1月21日(火) 13:00~14:30
講師	一般社団法人留学生就職サポート協会理事長 南雲 智 氏 (東京都立大学名誉教授、桜美林大学教授、大妻女子大学副学長を歴任)
テーマ	留学生の就活支援改善策について

目的	『留学生の日本就職ガイド2021』(論創社)の編著者である講師の話から今後の改善策を探る。
法学部 法律学科	
日時	令和元年12月19日(木) 18:00~20:00
講師	ー (司会:法律学科 竹之内 幸孝 教授)
テーマ	授業評価アンケートに基づくFD
目的	法律科目の授業評価アンケートの結果をPDCAサイクルに照らして検証を行った。授業理解度の指標(70%以上)と授業レベル、理解を高めるための教授方法を中心に意見交換を実施した。
日時	令和2年1月16日(木) 18:00~20:00
講師	法律学科 金 安妮 講師
テーマ	千代田DJグランプリに関する報告
目的	武蔵野大学附属千代田高等学院の生徒に対して行われた「身近な法的トラブルとその解決について」の発表を素材に、法学における高大連携のあり方、アクティブ・ラーニングの方法について検討を行った。
法学部 政治学科	
日時	令和元年10月31日(木) 16:30~19:00
講師	政治学科カリキュラムレビュー小委員会
テーマ	2021年時間割構築に伴うカリキュラムレビュー
目的	2021年時間割をめぐってカリキュラムレビュー検討
日時	令和元年11月(3日間に分けて実施) 16:30~19:00
講師	政治学科カリキュラムレビュー小委員会+政治学科専任教員
テーマ	2021年時間割構築に伴うカリキュラムレビュー
目的	学科会議のフィードバックにより科目の内容改善を検討
経済学部 経済学科	
日時	令和元年6月3日(月) 10:00~10:30
講師	経済学科 専任教員
テーマ	2020年度カリキュラムについて
目的	2020年度の時間割構築の開始に向けて、担当科目の確認、体系的な学びを考えたいうえでの各科目の開講期について学科教員で検討を行う。
日時	令和元年7月3日(水) 16:15~17:45
講師	武蔵野大学 高橋 済 非常勤講師
テーマ	非常勤講師を交えてのカリキュラムに関する確認
目的	本年度の非常勤講師をお招きし、経済学科のカリキュラム体系やおもにミクロ経済学の学修状況について検討および確認を行う。
日時	令和元年10月17日(木) 17:45~18:30
講師	経済学科 専任教員
テーマ	経済学部SDGs宣言および実行目標の検討
目的	学科におけるSDGsへの取り組みを振り返り、2020年度以降に向けてSDGs実行目標の設定と具体的な取り組みを検討する。
日時	令和元年11月21日(木) 17:45~18:45
講師	経済学科 専任教員
テーマ	学科出口(就職)状況の把握と今後の検討

目的	経済学科卒業生(2019年3月卒)の就職状況を確立し、学科ブランドビジョンの内容・達成の方策を検討する。
日時	令和2年1月9日(木) 16:30~17:30
講師	経済学科 専任教員
テーマ	授業評価アンケート結果の振り返り
目的	授業評価アンケートの結果等を受け、学科全教員で授業の質改善等について議論を行う。
日時	令和2年1月20日(月) 12:20~13:10
講師	武蔵野大学 高橋 済 非常勤講師
テーマ	非常勤講師を交えての後期授業の振り返り
目的	本年度の非常勤講師をお招きし、後期授業の振り返りを行う。
経営学部 経営学科	
日時	平成31年4月3日(水) 9:00~10:00
講師	—
テーマ	経営学科の留学支援方針に関する学生への周知方法について
目的	前年度末に学科にて決定した新しい留学支援方針の周知方法を検討すること。
日時	令和元年5月16日(木) 17:30~21:00
講師	—
テーマ	カリキュラム
目的	経営学科カリキュラムの改善
日時	令和元年6月5日(水) 18:00~21:00
講師	—
テーマ	プロモーション
目的	経営学科の特徴の共通言語化
日時	令和元年6月18日(火) 18:00~20:00
講師	—
テーマ	プロモーション
目的	WEBプロモーションの企画
日時	令和元年9月18日(水) 15:30~17:00
講師	—
テーマ	経営学科生のキャリア形成に貢献する授業内容の検討
目的	2020年度より開講予定の《現代ビジネス1・2》にて実務家ゲストスピーカーを招聘し、経営学科生に多様なキャリアの可能性を教示できないか、検討すること。
日時	令和元年9月18日(水) 18:00~20:00
講師	—
テーマ	オムニバス授業の反省
目的	1~2学期オムニバス授業の問題点の共有
日時	令和元年10月16日(水) 18:00~23:00
講師	—
テーマ	次年度の運用・改善計画
目的	予算申請を踏まえ、次年度の運用・改善、新規企画等を議論すること。
日時	令和元年12月18日(水) 17:00~18:00
講師	—
テーマ	授業外学修時間を増やす
目的	「授業外学修時間が少ないこと」という課題への取り組み方を決めること。
経営学部 会計ガバナンス学科	
日時	令和2年2月6日(木) 15:30~17:30
講師	—
テーマ	授業評価について。簿記の検定試験の段階的な受験について再検討。

目的	会計ガバナンス学科2期生、1期生の授業評価の内容・結果を総合的に検討する。また、簿記検定の合格状況のデータを分析して、適切な検定試験を再検討する。
データサイエンス学部 データサイエンス学科	
日時	令和元年12月16日(月) 10:00~11:00
講師	データサイエンス学科 林 康弘 准教授
テーマ	データサイエンス学科における協調学習の成果と今後
目的	今年度データサイエンス学部のほぼ全ての授業で展開したグループワーク、協調学習についての成果について授業評価アンケートから分析を行った上で、今後の展開について議論を行う。グループワーク形式の授業をより浸透させる方法についても考察した。
人間科学部 人間科学科	
日時	令和元年5月31日(金) 16:30~
講師	人間科学科 城月 健太郎 准教授
テーマ	公認心理師の資格取得に関するカリキュラムの実態と2020年度・2021年度のカリキュラム運営について
目的	現2年生から実施している公認心理師に関するカリキュラム運営の実態と、来年度からスタートする実習科目の運営方法、科目の履修状況などについて共有を行った。さらに、大学・学科のカリキュラムと資格課程に関する科目の整合性や、学科カリキュラムの将来性について議論が行われた。
日時	令和元年7月26日(金) 16:30~
講師	入試センター事務課 飯山 晴信 課長
テーマ	平成31年度入試総括の概要について
目的	本学への志願者状況、及び、日本全国、他大学の総志願者数の状況を共有し、本学の入試志願者の傾向を把握し、学生指導との相関を考察し、入試センター事務課との協力を推進する。
日時	令和元年7月26日(金) 17:30~
講師	人間科学科 辻 恵介 教授
テーマ	障がいをもつ学生への合理的配慮について
目的	障がいに対する配慮とはどのようなものか、コンセンサスを形づくる必要があるため、授業を受けやすいという観点からなされるべきであり、単位を取りやすくなるための観点ではないことを確認し、事務局への提言、学生への支援について協議する。
日時	令和元年9月20日(金) 16:30~
講師	人間科学科 辻 恵介 教授
テーマ	令和元年度2学期授業評価アンケートについて
目的	令和元年度2学期授業評価アンケートの集計結果を基に、学生の授業外学修時間の実態を把握し、学生が主体的に学修するよう導くための方策を協議する。
日時	令和元年10月25日(金) 16:30~
講師	人間科学科 岩本 操 教授
テーマ	精神保健福祉士教育内容の見直しと新カリキュラム案のポイント
目的	平成30年12月より「精神保健福祉士の養成の在り方等に関する検討会」(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部)において教育内容の見直し検討された、令和元年6月に新カリキュラム案が公表された。同検討会の構成員である岩本より新カリキュラム案の要点を説明し、学科における教育体制と今後の対応について協議する。
日時	令和元年11月22日(金) 18:00~

講師	人間科学科 大山 みち子 教授
テーマ	公認心理師に対応する本学のカリキュラムと実習体制の構築について
目的	公認心理師養成機関連盟(以下、公養連)の動きを伝達・共有する。それをもとに本学学部および大学院段階でのカリキュラム編成と実習体制の構築について検討する。
日時	令和元年12月13日(金) 16:40~
講師	人間科学科 辻 恵介 教授
テーマ	令和元年度3学期授業評価アンケートについて
目的	令和元年度3学期授業評価アンケートの集計結果を基に、学生の授業外学修時間の実態を把握し、学生が主体的に学修するよう導くための、アクティブ・ラーニングの重要性について討議する。
日時	令和2年3月20日(金・祝) 13:00~18:00
講師	人間科学科 日野 慧蓮 講師ほか
テーマ	仏教からみる食べること・生きること
目的	第5回目となる「武蔵野言語聴覚カンファレンス」。今回は、リハビリテーションの重要な領域である摂食嚥下障害に対する支援のあり方を、仏教思想の観点から問い直し、リハビリテーションと人間学の融合を目指す。
人間科学部 社会福祉学科	
日時	令和元年6月7日(金)・8月2日(金)・11月15日(金) 令和2年1月24日(金)
講師	社会福祉学科教員
テーマ	社会福祉特講1・2・3・4を活用した学科教員の相互授業参観と教育方法理解
目的	社会福祉特講1・2・3・4は社会福祉学科の必修科目で、社会福祉士受験コースと非受験コースに別れて受講することになっている。特に非受験コースは、学科全教員がオムニバス形式で出題課題の解説を行う授業となっており、本講義に学科教員が参加し、他の学科教員の授業方法を参観すると共に、その手法について学びを深める。
日時	令和元年10月24日(木)
講師	社会福祉学科教員
テーマ	今後の社会福祉学科を考える
目的	社会福祉士の資格法の改正が当年度行われ、社会福祉士の新たな役割が模索されていることと併せて、大学が本格的な競争時代に突入り、武蔵野大学社会福祉学科として存在感を示していく必要がある中で、カリキュラムの見直しに併せて、今後、どのような教育が求められるのかについて、入試センター事務課から提供いただいた学科のポジションに関する資料と課長からの説明を基に、学科教員間で「今後、求められる学科教育の在り方」について意見交換を行った。
日時	令和2年1月17日(金)
講師	社会福祉学科教員
テーマ	令和元年度前期学生授業評価アンケートに基づいた評価の振り返りと分析、改善策の検討
目的	①「授業外の学修時間」、②「授業の理解度」の観点から、目標数値を達成できた場合、または達成できない場合、その理由を抽出し学科で共有化、並びに②DP1~4の観点から、GP(Good Practice)、課題を抽出し学科で共有化を行う。
工学部 環境システム学科	
日時	令和2年1月8日(水) 9:30~12:10
講師	環境システム学科教員
テーマ	授業評価アンケートに基づく学科FD

目的	授業改善のための知見の共有、意見交換
日時	令和2年3月2日(月) 17:00~19:00
講師	環境システム学科教員
テーマ	プロジェクトベースドラーニングの手法や授業運営について
目的	「環境プロジェクト1・2」の質の向上
工学部 数理工学科	
日時	令和元年5月9日(木) 16:45~17:45
講師	—
テーマ	「学生目線での授業評価」について
目的	平成30年度学科FDで実施した「教員による講義参観」から得た結果の再確認と改善案の検討
日時	令和元年12月12日(木) 17:40~18:40
講師	—
テーマ	「授業アンケート結果」について
目的	授業アンケート結果を元に、現状分析、DP検証を行う。
日時	令和2年2月27日(木) 14:30~15:30
講師	—
テーマ	「講義参観」を元にした検討
目的	各自で実施した講義参観結果を元に、授業への提案を行う。
工学部 建築デザイン学科	
日時	令和元年7月16日(火) 10:30~12:00
講師	建築デザイン学科教員
テーマ	入学時の志望動機や併願校の調査結果
目的	建築デザイン学科における入口戦略(新入生へのアピール、質の確保)の見つめ直し
日時	令和元年9月24日(火) 18:00~19:00
講師	建築デザイン学科教員
テーマ	中長期における学科の体制について
目的	学科の教員及びスタッフ体制についての要件定義
日時	令和2年1月20日(月) 17:30~18:30
講師	建築デザイン学科教員
テーマ	令和元年度前期授業評価アンケート結果
目的	建築デザイン学科におけるPDCAサイクルの確立に向けた授業改善
教育学部 教育学科	
日時	令和元年10月1日(火) 16:20~17:50
講師	上智大学教授 奈須 正裕 氏
テーマ	教育学部FD研修「新学習指導要領とこれからの教育」アクティブラーニングの手法
目的	具体的なアクティブラーニングの手法を紹介してもらい、本学科で導入可能なアクティブラーニングについてご指導いただく。専門:教育心理学・教育課程・総合学習
日時	令和元年12月24日(火) 14:40~16:10
講師	教育学部 堀米 孝尚 教授
テーマ	学科FD研修・教育学部授業改善に向けて①「本年度授業評価が最も高かった授業(教員)の参観」
目的	保健体育の堀米先生の授業は、少人数クラスだけではなく、100人を超えるクラスでも数値が本学科専任教員では最も高かった。その授業方法はどのようなものなのかその秘訣を学ばせていただきたく、学科FDとして専任教員による授業参観を実施させていただく。新学習指導要領に新たに取り入れられた「がん教育」をテーマとした模擬授業であり、アクティブラーニングを取り入れた素晴らしい授業であった。
日時	令和2年1月9日(木) 5・6限教授会・科会終了後

講師	—
テーマ	教育学部FD研修・授業改善に向けて②「授業評価が高かった授業担当教員からその秘訣を学ぶ」
目的	授業参観は、堀米先生の保健体育1コマとしたが、その感想等を参観した先生方に述べていただいた。また、各項目で本年度の授業評価の高い先生方に、どのような授業を行っているのか授業改善に向けてその秘訣等を披露していただく。
日時	令和2年3月4日(水)・5日(木) 1泊2日
講師	①「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」語り部ガイド担当職員 ②「南三陸ホテル観洋」語り部バス担当従業員 ③「3.11みらいサポート」震災語り部担当職員 ④雄勝の硯石についての説明:教育学部 廣瀬 裕之 教授 ⑤三陸海岸の地質についての説明:教育学部 高橋 典嗣 特任教授
テーマ	東北復興:SDGs Goal11 NEVER FORGET 3.11
目的	東北を訪問し、「東日本大震災からの復興」の現状や課題を把握するとともに、「SDGs(Goal11等)」の視点から課題を把握の上、今後の各教員の教育活動に生かすことにより、教育学部における教育内容の一層の充実を図る。また、学科でここ2年間学習してきた各地の地層や岩石について深めるとともに、学童用の硯石の産地として有名であった雄勝硯について知る。
教育学部 こども発達学科	
日時	令和元年10月1日(火) 16:20~17:50
講師	上智大学教授 奈須 正裕 氏(教育心理学)
テーマ	「新学習指導要領とこれからの教育」アクティブラーニングの手法
目的	教育学部教育学部・こども発達学科における具体的なアクティブラーニングの手法を、講義とワークショップ形式で紹介してもらい、教育場面を想定して具体的に検討する。
日時	令和元年11月14日(木) 16:20~17:00
講師	こども発達学科 義永 陸子 学科長
テーマ	授業評価アンケートによるFD(1)概要報告
目的	授業評価アンケートの概要について把握し、学科としてのFDのねらいを明確化する。
日時	令和元年12月12日(木) 16:20~17:00
講師	こども発達学科 今福 理博 講師
テーマ	授業評価アンケートによるFD(2)GP報告
目的	授業評価アンケートにおいて評価の高かった、特に100人以上のクラスサイズでの講義科目での工夫について学ぶ。
日時	令和元年12月24日(火) 14:40~16:10
講師	教育学部 堀米 孝尚 教授
テーマ	学科FD研修・教育学部授業改善に向けて①「本年度授業評価が最も高かった授業(教員)の参観」
目的	本学科で導入可能なアクティブラーニングについて、実際の授業の参観を通して学びあう。
日時	令和2年2月17日(月)・18日(火)
講師	こども発達学科 生井 亮司 教授、箕輪 潤子 准教授
テーマ	アートにおけるリサーチと子どもの世界を理解することについての実践的研修
目的	アクティブ・ラーニングとその深化について、検討する。Arts based Researchという概念の具体的な実践の方法として実施されているA/r/tographyといった研究方法への理解を図るとともに、実際にワークショップ(walking A/r/tography)を行う。現代の幼児教育の課題との検討を行う。

薬学部 薬学科	
日時	令和元年8月28日(水) 15:00~17:00(学部報告)
講師	発表者:薬学科教員5名(発表順:橋元講師、服部講師、高橋講師、成田助教、岡田助教) オーガナイザー:薬学科 大畑 慎也 講師
テーマ	薬学科内の研究室交流・共同研究の促進に向けた若手教員による研究発表【薬科学研究科との合同企画】
目的	薬学科内の各研究室が教員三人体制となったのを契機に、講師、助教、助手、ポスドク層が自身の研究内容を口頭発表し、今後の研究活動の円滑化や共同研究の促進を図ることを目的とした。
日時	令和元年8月28日(水) 15:00~17:00(研究科報告)
講師	発表者:薬学科教員5名(発表順:橋元講師、服部講師、高橋講師、成田助教、岡田助教) オーガナイザー:薬学科 大畑 慎也 講師
テーマ	薬科学研究科内の研究室交流・共同研究の促進に向けた若手教員による研究発表【薬学科との合同企画】
目的	薬学科内の各研究室が教員三人体制となったのを契機に、講師、助教、助手、ポスドク層が自身の研究内容を口頭発表し、今後の研究活動の円滑化や共同研究の促進を図ることを目的とした。
日時	令和2年1月7日(火) 15:15~16:15(学部報告)
講師	「1、2年次生の学修支援について」 担当 薬学科 片川 和明 講師 「授業中の演習問題へのPCやスマートフォンの利用」担当 薬学科 室井 正志 教授 「授業評価アンケートデータを踏まえた授業改善」担当 薬学科 廣谷 功 教授
テーマ	・アクティブ・ラーニングの実施の仕方について実際に実施している方法を薬学科教員に紹介する。 ・低学年に対する学修支援について本年度の実施内容を薬学科教員に紹介する。 ・令和元年度1・2学期授業評価アンケートデータを踏まえた授業改善
目的	・双方向授業による学生の講義内容への興味をあげる手法や低学年の成績不良学生に対する支援など、薬学科で解決すべき問題点に対する解決方法の提案を行う。 ・学生による授業評価の結果の解析を行い、学部・学科運営におけるPDCAサイクルの確立にあたり、授業改善の資料に供する。
日時	令和2年2月18日(火) 13:30~15:40(研究科報告)
講師	薬科学研究科 後期博士課程大学院生:1年生2名、同2年生6名
テーマ	後期博士課程大学院生による研究進捗状況の報告【薬学科・薬学研究他との合同企画】
目的	薬科学研究科の後期博士課程に在籍する1年および2年の院生がこれまでの研究成果を発表し、進捗状況を把握して今後の研究指導や研究の方向性について議論することを目的とした。
日時	令和2年2月20日(木) 13:00~18:00(学部報告)
講師	ブリーフィング・ポスター発表: 薬学部・薬学研究科 各研究室教員 特別講演1: 「エンドトキシン疾患の克服に向けて」 薬学科 室井 正志 教授 特別講演2: 「生体膜脂質の基礎研究から医療製品の規制科学の世界へ」 医薬品医療機器総合機構 審査センター長・レギュラトリーサイエンスセンター長 新井 洋由 氏

テーマ	本学の「ブランドビジョン2020 実行目標」に掲げた「薬学系統合企画（薬科学研究科・薬学科）」に基づき、各研究室・部署の「薬学部のSDGs実行目標」を明確にする。
目的	各研究室・部署の今年度の研究成果を披露すると共に、「薬学部のSDGs実行目標」を明確にする。また、新任の教授の研究内容を理解すると共に外部の講師の講演を拝聴して、教員の知識の拡大を計る。
看護学部 看護学科	
日時	令和2年1月8日(水) 15:15～16:30
講師	看護学科 荻野 雅 学科長
テーマ	令和 元年度 授業評価アンケート結果を基にした検討
目的	平成31年・令和元年度 授業評価アンケート結果を踏まえ、大学数値目標の達成状況、DP検証、アクティブラーニング実施率、DP・到達目標管理表設定率等について討議し、今後の授業改善の具体的方法を見出す。
日時	令和2年2月7日(金) 10:00～12:30
講師	データサイエンス学科 上林 憲行 教授 データサイエンス学科 中村 亮太 准教授
テーマ	看護学科における教育の情報化・スマート化に向けて—データサイエンス学科の教育・実践事例を通して—
目的	履修生のレディネスをはじめ、学習環境が徐々に著しく変化していく現状の中で、今後の看護学科の教育において「AI (ICT) 等の教育サービスを活用した実現可能な教授方法」の検討が迫られることが予想される。本講演会では、データサイエンス学科における講義(教授)方法について、具体的なAI活用例や素材作り等の実践事例をご教示いただき、意見交換を通して本学科(各看護領域)における教授方法を考える機会とする。
教養教育部会	
日時	平成31年4月1日(月) 15:00～16:30
講師	日本語コミュニケーション学科 村澤 慶昭 教授 日本語コミュニケーション学科 藤浦 五月 講師
テーマ	武蔵野BASIS日本語リテラシーFD研修会
目的	新任の先生方との顔合わせと授業に関するご説明
日時	平成31年4月2日(火) 13:00～15:00
講師	教養教育部会 小川 桂一郎 部長
テーマ	武蔵野BASISセルフディベロップメントFD研修会
目的	「セルフディベロップメント」科目をご担当いただく先生方との顔合わせと授業に関するご説明
日時	平成31年4月3日(水) 15:00～17:00
講師	教養教育部会 小川 桂一郎 部長
テーマ	日本語FD研修会
目的	「日本語」科目をご担当いただく先生方との顔合わせと授業に関するご説明

日時	平成31年4月8日(月) 10:00～17:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	ヨーロッパ語FD研修会
目的	「フランス語」「ドイツ語」「スペイン語」をご担当いただく先生方との顔合わせと授業に関するご説明
日時	平成31年4月10日(水) 13:00～17:00
講師	武蔵野大学 西本 照真 学長
テーマ	2021年度新カリキュラム説明会
目的	2021年度に向けた新カリキュラムの説明
日時	令和元年5月31日(金) 12:00～13:00
講師	教養教育部会 福士 輝美 教授
テーマ	司書・司書教諭FD研修会
目的	「司書」・「司書教諭」科目をご担当いただく先生方との顔合わせと授業に関する打合せ
日時	令和元年9月6日(金)・9月11日(水)・9月13日(金)
講師	教養教育部会 小川 桂一郎 部長
テーマ	健康体育FD研修会
目的	来年度の「体育」科目をご担当いただく先生方との顔合わせと授業に関する打合せ
日時	令和元年9月10日(火) 10:00～15:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	英語FD研修会
目的	・カリキュラム改革のあらまし ・質の高い授業の展開を実現するための工夫
日時	令和元年9月12日(木) 13:00～15:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	ヨーロッパ語FD研修会
目的	・カリキュラム改革のあらまし ・質の高い授業の展開を実現するための工夫
日時	令和元年10月15日(火) 13:00～15:00
講師	—
テーマ	2020年度新規情報科目の情報共有及び教材作成におけるMUSICとの連携
目的	情報科目は2020年度より講義科目および講義内容を刷新するため、これまで情報科目を担当していただいた非常勤講師および委託業者、またMUSICおよび武蔵野学務室の関係者が出席し、新規科目の内容についての情報共有およびMUSICが提供する共通教材、共通ツールに関する紹介を行う。
日時	令和元年11月19日(火) 10:40～12:10
講師	—
テーマ	2020年度情報必修科目の情報共有および授業のデザインモデルの紹介
目的	10月の研修会で説明した情報科目の内容について、シラバス案および授業の運営方法のモデルについて紹介し、実際にどのように講義を実施するのかについて非常勤講師および委託業者と確認する。また2019年度の講義内容についての講師及び学生からのアンケート内容について情報を共有する。

日時	令和2年1月30日(木) 11:00～12:00
講師	手仕事工房 岡崎 博樹 氏
テーマ	情報科目で利用する授業支援ツールの紹介とクラス分けについての確認
目的	情報科目で利用する授業支援ツールを作成した手仕事工房岡崎氏より、ツールの機能及び利用方法について非常勤講師および委託業者に紹介していただく。また11月の研修会時に課題となった情報必修科目のクラス分け案についてMUSICより説明する。
日時	令和2年1月30日(木) 13:00～16:00
講師	東京大学名誉教授・本学客員教授 小林 寛道 氏 他3名
テーマ	「健康体育」から「スポーツと身体科学」へ
目的	2020年度から始まる新しい体育実技授業「スポーツと身体科学」の理念と授業内容の理解を目指す。
日時	令和2年2月12日(水) 10:00～12:00
講師	日本語コミュニケーション学科 村澤 慶昭 教授 日本語コミュニケーション学科 藤浦 五月 講師
テーマ	武蔵野BASIS日本語リテラシーFD研修会
目的	・授業改善点の共有 ・来年度授業について
日時	令和2年2月28日(金) 10:00～15:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	英語FD研修会
目的	・今年度の英語科目について ・令和2年度英語の教育方針について
日時	令和2年3月4日(水) 10:00～12:00
講師	教養教育部会 平田 秀 講師
テーマ	日本語FD研修会
目的	・今年度の日本語科目について ・令和2年度日本語の教育方針について
日時	令和2年3月4日(水) 14:00～16:00
講師	教養教育部会 遠藤 祐介 教授
テーマ	中国語FD研修会
目的	・今年度の中国語科目について ・令和2年度中国語の教育方針について
日時	令和2年3月4日(水) 15:00～17:00
講師	教養教育部会 李昌 圭 教授
テーマ	韓国語FD研修会
目的	・今年度の韓国語科目について ・令和2年度韓国語の教育方針について

令和2年度 FDSD 活動計画について

1 令和2年度 FDSD 運営方針

令和2年度FDSD運営方針	
◇ 学修者本位の教育へ転換	『何を教えたか』から『何を学び、身に付けることができたのか』への転換
◇ 学科・研究科主体のFD活動を推進	<ul style="list-style-type: none"> 『中長期計画』『出口保証』『教育の質保証』に対し、各学科・研究科が目標達成に向けた自由度と裁量を持ち、学科・研究科主体のFD活動を推進する 各学科が4年に1度程度学生FDを実施し、学科内で学生の授業への主体的参加をより高めるための課題、ノウハウ、スキルを共有する
◇ 教員の主体的な参加を推進	教員の主体的な参加を推進するため、授業実施上の課題に対応するワークショップ形式の研修を推進
◇ 教員に必要な知識及び技能習得の推進	<ul style="list-style-type: none"> 大学方針説明会を年2回実施し、全教員に大学のビジョンや方針を共有する機会を設け、大学全体の機能強化を図る 全教員が3年に1度程度『建学の精神』『ハラスメント』『障がい学生の修学支援』等について理解を深めるための研修を推進する

2 令和2年度 実施計画

全学FDSD			
開催	テーマ	講師	備考
【配信期間】 5月27日(水) 7月31日(金)	<ul style="list-style-type: none"> データサイエンス学部の授業運営について — 全学の授業内容及び教授法の向上に向けて — ICTの活用について 	<ul style="list-style-type: none"> MUSIC所属教員 データサイエンス学部教員 藤本 かおる准教授(日本語コミュニケーション学科) 	動画にて配信
9月17日(木)	外部アセスメントの今後の活用について— トライアル結果を基に —	学内教員	後期方針説明会予定日
12月予定	障がい学生の修学支援について(発達障がい・メンタルヘルスなど)	学外教員又は学内教員	
目的別FDSD			
開催	テーマ	講師	備考
9月予定	ワークショップ型FD(テーマ:グループワーク、アクティブラーニング)	学外教員	
10月予定	SDGsとは何か	学外教員	
12月予定	<ul style="list-style-type: none"> シラバスについて 情報セキュリティについて 	学内教員	
学科FD ※各学科の状況に応じてテーマを検討。以下は推奨テーマ案			
開催	テーマ	講師	備考
9月予定	学生FD	学内教員	各学科で設定
年度内	BYODの推進—キャンパス内でのPC利活用について—	MUSIC所属教員	各学科で設定

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University

武蔵野大学2019FDレポート

発行：FDSD 検討小委員会

発行日：令和2年7月27日

事務局：武蔵野大学 教育改革推進室

〒135-8181 東京都江東区有明3-3-3

TEL 03-5530-7729 FAX 03-5530-3812

e-mail kaikaku@musashino-u.ac.jp

URL <https://www.musashino-u.ac.jp/>